江東区夢の島競技場 & 夢の島公園　野外彫刻作品マップ

https://www.google.com/maps/d/edit?mid=1Fbs79ydfyB0IZZuhCKgDkt4mP9hUGLc&usp=sharing

1　白井翔平 / 無視の道

2　新妻篤 /self portrait

3　重松慧祐 / 黎明の鵺鳥のスカル、仙と天と野の考察の続き

4　水田有紀 / 四面四鬼

5　室屋裕一 /Occur

6　新妻篤 /face

7　水田有紀 / とりのおやど

8　石川直也 / 自立しない人８

9　竹内七月姫 /relic

１０　石川慎平 /BEEP!

１１　新妻篤 / 四角い海

１２　新妻篤 /adjacent lonely #2

１３　石川直也 /MY SCULPTURE

１４　石川直也 / 冬の日 - 考える人 -Winter day -The thinker-

１５　大石麻央 / ほんとも、ほんとの、うそ

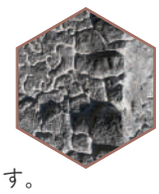
１６　松隈健太朗とその家族 /Dreaming inna Dream Land

１７　木村知史 / フレームの途中にある舞台 A stage in the middle of the frame

１８　荒木美由 / いしのない世界

江東区夢の島競技場

1　白井翔平 / 無視の道 /2021～/ 黒御影石



散歩をしていると、小さな生き物にも目を止めることができます。この石を彫っているときに思い出したのは、蟻です。
蟻は私たちには見えない、仲間の作った道を通って行動します。
私は子どもの頃に蟻の巣を見つけては、枝をその穴に突っ込むという残逆な行為をしました。
この石の下にもきっと蟻やそれ以外の虫が潜んでいるでしょう。
かつてここでは「夢の島焦土作戦」が展開されました。そして、この道の奥に「スケボーパーク」ができます。
さらに奥にはスカイツリー、周りには小さな窓が沢山。
天気が良ければ、波の煌めきがチラチラと、雲はどんな形やら。
この石も形が変わります。あるものをないものとする人にはそれは見えないかも知れません。

2　新妻篤 /self portrait/2022/ 樟

都市の隙間を流れていく海、鉄道、漁船、カモメ、潮風、
流れていくそれらの景色をただ見つめている木彫りの人物（朽ちていく己の運命を諦観しているのか）
そんなイメージが浮かび上がり形にしていきました。
普段はアトリエにこもり石彫をずっと続けていますが、こんな機会だからこそ、
恒久的じゃない素材の持つ特性と景色との関わりを意識した作品になりました。

3　重松慧祐 / 黎明の鵺鳥のスカル、仙と天と野の考察の続き / 2019-2022/ 伊達冠石 小松石 大理石

石の彫刻をつくるということには強烈な物質の抵抗の中で獲得できる存在感の実感や好奇心に身を委ねられる作者の度量が重要な要素だと考えていますが、その格闘の末に見出す深淵の中では現実世界への美の拡散と共有を望まなければその行く先には実感に飢えた感情が引きずって像をなす荒野と尽きない陶酔への代償として自身の衰弱がありました。いい歳になって頭も冷えたので、そこで出会った何かと手を繋いで（視覚情報としての）光の領域に連れて帰ってくることに決めました。

4　水田有紀 / 四面四鬼 /2011/ 白御影 小松石

日本がテーマでアニミズム的な視点から山岳信仰に視点を絞り
神の様な存在であったモノが、いつしか影の存在となり隠、おぬ、おにと訛っていき鬼という存在に変化していく行程が面白く、
鬼というものには様々な面があると感じ、この四面の鬼を制作しました。

夢の島公園

5　室屋裕一 /Occur/2022/ 陶

かつて何かであったものも、これから何かになるものも、
わたしたちがつくったものたちも、わたしたちの生命も、
ただ流れてゆく現象に過ぎないけれど、
わたしたちはそこに何を見るのでしょうか。

6　新妻篤 /face/2022/JESMONITE

今回のお話をいただいた時に、シンプルに見た人にインパクトを与えられるものをと思い作りました。
上手くいけばひと月の間で表面の塗装が剥がれて別の景色が見えてくるかも。
裏側は製作する過程で出来た偶然の凸凹ですがそこも形が面白いのであえて凹凸が目立つ様に銀色にしました。
刻一刻と変化する３歳になる子供の顔をモチーフにしています。

7　水田有紀 / とりのおやど /2022/ ミクストメディア 不織布 石膏 銅板 材木

楽しいことが大好きな石膏の鳥たちが、夢の島公園に遊びに来ました！
新木場の木材を使っておもてなし。
大きく腕を広げたアメリカデイゴの木でめいいっぱい楽しみます。

8　石川直也 / 自立しない人 8/2022/ 大理石

彫刻自身では立つことができない。何かにもたれかかることで初めて立てる彫刻。
重心を取り立っている人体彫刻ははたして自然だろうか、我々は自立して立っていると言えるのだろうか。
そして自立とは何だろうか。自分が立つことすら困難なこの土地で、彫刻を作る。
私は彫刻が立たなくても良いのではないかと思った。
そうして、どこかで自立できる彫刻を想像しながら《自立しない人》を作った。それは私が初めて自然と思える彫刻だった

9　竹内七月姫 /relic/2017/ 鉄

鉄を溶接して多面体に再構成した岩をモチーフに制作しています。
溶接して作られた辺の硬さと、錆で仕上げた面の優しさによって作られた金属彫刻の面白さを発見してもらえたらと思います。

夢の島公園

１０　石川慎平 /BEEP!/2022/ 樟 グリッター

物の表面に着目して彫刻を制作。
あらゆる視覚情報が溢れる現代社会において、物体として存在する彫刻の強さや不確かさについて考えています。

１１　新妻篤 / 四角い海 /2020/ 蛇紋岩

2018～2020 年制作。人物彫刻でやりたいイメージ (閉塞と解放) と技術的な特異点を意識して作りました。
お風呂と人物は一つの石から彫り出しています。
彩色の際に実際のお風呂の様に水を溜めて水面を境に色を変えるように塗料を塗りました。(水中部分が石の地の色です。)
室内風景を題材にした個展の中の一作でしたが、野外に置くことでちょっと不思議な世界感が増しました笑

１２　新妻篤 /adjacent lonely #2/2017/ 大理石

2017 年制作。硬く重い石という素材で、今を生きる頼りなく物憂げな人物の一瞬の佇まいを凍結したい欲求があります。
「四隣の寂寞」と題した個展の為に作った人物像の一体です。
彫刻を作ることで「存在していることの弱さ⇆強さ」を考えていたいです。

１３　石川直也 /MY SCULPTURE/2020-2022(製作中)/ 大理石

「my sculpture」という手乗りサイズの小さな彫刻から始まりました。
生活の中に彫刻がいる、そんな日々の中で、いつか誰かにとって一番の彫刻になってほしい、
そんな願いがこのタイトルには込められています。
大きなサイズの「MY SCULPTURE」はそれを野外彫刻として展開するものになります。公共の彫刻にも、
通勤や散歩でいつも通り過ぎる彫刻が、いつの日か思い出や日常に思いを馳せるような存在になることはあるように思います。
この彫刻も誰かにとって、そんな彫刻になることを願っています。

１４　石川直也 / 冬の日 - 考える人 -Winter day -The thinker-/2016/ 大理石

考える人はこの当時、日常をテーマに彫刻をしていました。この作品はコーヒーやお菓子を食べながら、
何かを考えている様子がモチーフとなっています。思い返せば、ロダンの考える人や弥勒菩薩半跏思惟像など、
昔から今にも残る彫刻には考えるポーズが多いように思います。
おそらく考える人は今も昔も変わらず自然なポーズなんだと思います。
実際に作ってみると、ただ何気なくしているポーズは彫刻としてとても自然で、なぜか良いんです。

夢の島公園

１５　大石麻央 / ほんとも、ほんとの、うそ /2010/ 羊毛 針金 石膏 鉛など

人は人を好きになるときにどこで判断するのか。
見た目だと言うのなら、顔を隠し、胸や性器もなくしてしまったらどうだろう。
それでも君は私を好きと言える？私は好きだよ。
好きだという気持ちに
性別も、年も、人種も、信じるものも、人であるかどうかさえも関係ないと思うから。

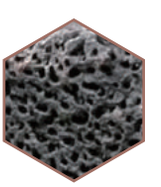
１６　松隈健太朗とその家族 /Dreaming inna Dream Land/2022/ 立木 布 木材 他

立木の擬人化。根は木の頭脳。
土の中でジッとその思考を広げ、地上へとその身体を成長させる。
彼等は土の中で何を想い、どんな夢を見ているのだろう

１７　木村知史 / フレームの途中にある舞台　A stage in the middle of the frame/ 2022/ ミクストメディア

この作品はギリシャにあるパルテノン神殿とアメリカテネシー州にあるレプリカのパルテノン神殿との間にある神殿の断片をつくる試みだ。反復する形で造られた建築はまさに反復する歴史のようである。もしそのフレームの中にほんのわずかな変化を起こせるとするならば、視点を切り取る　操作する行為によって、普段情報として抜け落ちて行くごく当たり前に見えている日常のようなものを再認識できるのではないだろうか。

１８　荒木美由 / いしのない世界 /2011-2022/ 白御影石 小松石 白と黒の間の石



年月を得た過去の作品を同じ空間に並べてみる。
彫り上げた石は展示が終わればゴミだろうか、否、変化し続ける。
これから１００年、１０００年、茫漠な時間を超えて人の意思はどこまで残っていくのだろうか。
あるはずのしかく、TWIN、呼吸する石を用いたインスタレーション。